

牧師室から (2021.11.14)

先週の主日礼拝(11月7日)において、3か月ぶりに聖餐式が行われた。感染防止のため、ぶどう液を入れたコップは市販の小さな紙のもので、パンも直接手で取るのではなく、配餐する長老がトングで個々に渡す。そして、礼拝の前に配られたビニル袋にぶどう液が入っていた紙コップを入れて持ち帰ることとした。

いろいろな注意はあるにせよ、聖餐式に参加した皆が厳粛な気持ちで感動を覚えていたにちがいない。十字架の上で裂かれた主イエス・キリストの体と流された血潮によって、赦されて生きる恵みを思い起こし、感謝で満ちた時間であった。いつも月の初めに行われた聖餐式の意味と有難さを改めて思い起こされたことであろう。

コロナの感染の増加によって教会堂での礼拝も休止され、聖餐式は考えられない状況であった。その中で、インターネットを見ると、聖餐式セットというのが販売されていた。パンとぶどう酒の一人分がセットになって袋にしっかり包装されていた。それを礼拝の前に配り、各々が司式者に従って開けて使うようになっているよう。それを見ながら、感染防止への配慮であるとしても、あくまでも私個人的な感想かも知れないが、聖なるものが商品化されているような拒否感を感じた。

また、あるところでは(外国の映像であったが)司式者一人でyou tubeの映像で聖餐式を行っていた。そのネットを通して、クリスチャン個人が用意しておいたパンとぶどう酒をもって、映像での司式者に従って参加するということであった。もちろん、空間を越えて働く聖霊の御働きに委ねるという儀式であるようだが、それに対しても抵抗を感じた。

見える恵みとしての聖餐式は、主の体である教会で、主の十字架の贖いによって救われた民が共に、見える形として主の食卓を囲むところに意味があるのではないか。もちろん、頭が固い個人の思いであると批判されるかもしれないが、やむを得ない事情で行うことができず、やっと思われた時の感激と感謝のために抑えておく方を選びたいのが私の持論である。

目まぐるしく変わっていくこの世の中で、教会も時代の風潮に何とか合わせて、共に歩もうとする試みも必要であることをすべて否定するつもりではない。しかし、かえって失っていく、聖なる領域、守るべきものを、しっかり守り、示していくことが私たちにもっと求められているのではないか。ときには時代遅れのように見えても、方向を失い、彷徨っている人たちの帰る場所として根源的な形を残しつつ、この世に警鐘を鳴らすことが、教会の役割であり、使命ではないのか、いろいろな思いが頭を過る。

(鈴木善姫牧師)